

## 読賣新聞（2015年3月8日）に県立広島大学保健福祉学部が紹介されました

その中の『うちの自慢』附属診療センターの内容をさらに詳しくまとめました。

県立広島大学保健福祉学部には、医学部のない公立大学で、全国唯一、診療所機能を持つ附属診療センターがあります。前身の短大の設立の翌年に、主に学生の臨床実習の目的で設けられ、現在、医師・理学療法士・作業療法士・言語聴覚士・看護師・メディカルソーシャルワーカーの資格を持つ教員が、地域の人たちに対して専門的な診療を行っています。この20年間、地域の人たちの暖かい理解と支援を受けて、臨床実習だけでなく、授業や卒業研究の協力など全学科の学生に対して、附属診療センターが活用されてきました。

附属診療センターでも特に地域での役割を期待されているのが、小児科の発達診療と子どものリハビリテーションで、年間約700人（延べ2500人）の子どもたちが通ってきています。リハビリテーションは、身体の麻痺を軽くするというイメージが強いですが、現在は、単に身体の部分に焦点をあて、そこを治すという医療モデルではなく、支援が必要な様々な子どもたちの意欲や自尊心を育み、社会の中で豊かに生きていくことを応援する生活モデルへと発展しています。

作業療法学科3年次生の発達障害治療学演習では、学生が3人1組で1人の子どもを1年間担当して、教員と一緒に定期的なリハビリテーション治療に参加し、その治療経過をレポートしてまとめる授業を行っています。治療場面は、一見、子どもと学生が遊具で楽しく遊んでいるだけのように見えますが、子どもたちは自分の行動をコントロールしたり、他の人とコミュニケーションをとったりする経験をしているのです。学校で友だちとトラブルになったり、学校への行きしぶりがあつたりして困っていた子どもたちも、作業療法室ではいきいきと活動することができます。学生たちは、お母さんからお話を聞き、実際に学校や地域の活動場所にも出かけて行って、そこで子どもたちの様子を観察し、治療場面だけでなく毎日の社会生活でも満足できるための方策も考えていきます。

演習を受けた学生たちは、「実際に触れあう中で多くのことを学び、子どもたちと共に自分も大きく成長できました。」「様々な角度から子どもを見ることができ、彼らの困り感に寄り添う大切さを学びました。」と感想を述べています。学生も子どもたちもこの出会いを大切にして、診療センターから巣立って、これからも前向きに進んでほしいと考えます。

